



家老「近江の桐原の親戚

んでいたのう。何事も熱心な若者であった。今はどこで、どんな暮らしをしているのじゃ。」

に、家族ともども身を寄せて、貧しい浪人暮らしをしているそうでございます。昼は農業に励み、夜は一人で勉強に打ち込んでいると聞きました。だれにも仕えず苦勞しているようで、人間としても磨きがかかっていることでしょう。」

光政「やはり、苦勞をしているのか。ならば、もう一度備前で取り立てよう。声をかけてみよう。」

家老「はい、承知しました。さっそく呼び戻しましょう。」

(残りの画面を全部引く)
こうして、蕃山は七年ぶりに二十六歳で再び備前藩に戻ってきました。

光政「蕃山、久しぶりじゃ。うれしく思うぞ。」

蕃山「殿様、呼び戻していただき、誠にありがとうございます。」

光政「そなたは、私のもとを離れて修業するという約束であったな。七年間の修業について、話してみよ。」

蕃山「長い間、おひまをいただきました。再び、お殿様にお仕えできて誠に幸せでございます。」

光政「どんな学問を、だれから学んだ

のじゃ。聞かせよ。」
⑫ 蕃山「なかなか『この先生に』と、思える方に巡り会えませんでした。近江の中江藤樹先生の門人にしていただくことができました。お陰で、八ヶ月ばかりの間、直接先生から学問の手ほどきを受けられました。その後、桐原に戻りましたが、手紙のやり取りで学問を続けることができました。」



蕃山は、これまで学んできた朱子学や儒学を深め、さらに、藤樹先生が研究している中国の学者「王陽明」の学問を初めて習い、藤樹

先生の『陽明学の研究』を学んだことも伝えました。
光政「そうであったか。良い修業ができたではないか。苦勞したことや学んだことを生かして備前のためにしっかりと働いてくれ。よいな。」
蕃山「はい。ありがたいお言葉に感謝申し上げます。私は、精一杯お伝えいたします。」

光政は、学問を好み、藩の政治に熱心な藩主でした。蕃山が藤樹先生に学んだ学問に強い関心を持ち、蕃山を呼んで、学問の話聞きませした。
⑬ 蕃山が再び仕えるようになって数年が過ぎました。ある日、光政は蕃山を呼びました。

光政「相談したいことがある。備前では、ここ数年、水害や干ばつなどの災害がたびたび起きている。食べる物がなくて、飢え死にする者も大勢出ている。わしは、災害を防ぐ方法がないかと、以前から悩んできた。熊沢、何か良い考えがあれば教えてくれぬか。」

蕃山「私は桐原にいたころ、飢え死にするほど貧しい生活を経験してきました。あのつらさは、今も決して



忘れられませんが、人民にとつて安心して働けるのは、何よりの幸せでございます。その上、災害が起きなければ藩も豊かになります。」

光政「そのために、藩としてしなければならぬことは何じゃ。」

蕃山「水害を防ぐには、山に木を植えて山林や山地に水を蓄える力をつけること。もう一つは、川に堤防を築き、洪水を防ぎます。また、余分な水はため池や川の水を上手く利用するため、水を引く水路が必要ですが、どれも大きな仕事ですが、計画的に進めることで、必ず実現できます。」

光政「そうか、なるほど。よく分かったぞ。わしは、人民が安心して暮らせる国を造りたい。熊沢、さっそく計画を立てよ。」

蕃山「はい、分かりました。」
蕃山は、こうして光政のもとで、山

地の植林、河川堤防、ため池工事をして洪水災害を防ぎ、農業の生産力を高める治水工事を次々に行いました。また、多くの人が学べる学校づくりを計画したり、人民が幸せに暮らせる国づくりを考えたりして、優れた政治を殿様のもとで行いました。
⑭ 蕃山は三十七歳の時大けがをしたので、三十九歳で仕事をやめました。



蕃山「私は、備前藩で人々が安心して暮らせるよう、たくさんの大仕事をさせてもらうことができ、幸せであった。これからは、藤樹先生から教えていただいた陽明学を、一人でも多くの人に伝えるために、本を書きたい。」

こうして、備前藩をやめた蕃山は、藤樹先生が日本で初めて研究した陽明学の教えを中心に、蕃山自身の考えを盛り込んで、多くの書物を出版しました。

しかし、武士を中心とした身分制度を重視する江戸幕府のおとがめを受けることになり、下総(茨城県)の古河藩に預けられました。地域の村人に慕われながら、七十三歳の一生を静かに閉じました。

- ▼制作・発行 藤樹紙芝居制作委員会
- ▼脚本・挿絵 高島藤樹会教材委員会
- ▼制作委員 足立清勝・飯田典子・石黒紀代子・北川暢子・清川貞治・高谷美智子・山本義雄 (五十音順)